



鹿 見島 戦 記

加々吉板

篠田久次郎編

大川良

25

20

15

10

篠田仁果禄
永島孟高画

繪本 鹿兒嶋戦記

東京 青成堂板

陸軍少佐江田國通氏

江田氏の薩州の
生れし
練兵法の
熟し
近衛一聯隊
二番大隊の長
三月四日吉治峠激戦
の際暴徒數多うち取
つゝ戦死せしげられたり





福岡縣下の賊魁
越知彦四郎



鹿兒嶋偽縣令
桂衛門

鹿兒島戰記五編上

東京 篠田仙果編

再び説植木口

の官軍の吉洛越

田原城への守

その兵との置

二股より進軍

あまふ暴徒の

雨天よ心とわら

沖の毛しゆん

狼狽よりりかり



鑊炮の先ごめあれ

火薬の需ふふ

うの果喰ひ

止るこゝろを

墨場と拵

散乱のせが

官軍植木口

くつ暴徒

宿と焼拂

○廿二日

山鹿口の鹿

兒の勢



○廿二日

思ひ

下ふ渡

植木

街

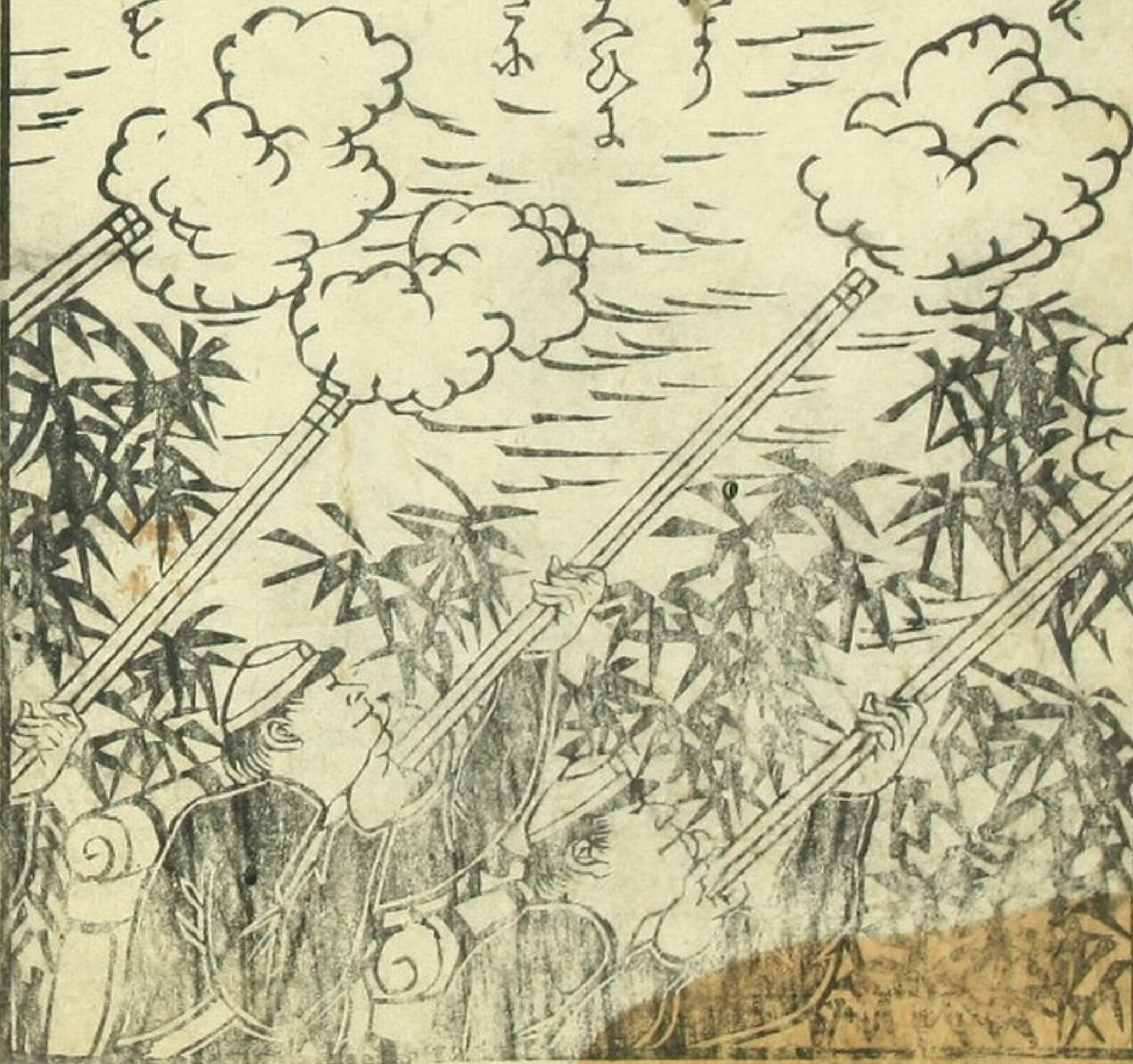
引あ

○廿二日

山鹿口の鹿

兒の勢

八代口の鏡町。宮の原の原の
 戦ひが廿三日かゝり町の
 官軍ハ勝利を得て
 宮の原の暴徒ハ戦中
 間及も廻り官軍と
 退るも討ふあけ
 苦戦は乃びされど相ひ
 退るも廿五日
 高津口の舟隈川の
 戦ひ翌廿六日ハ被る川を
 瀑とて砲戦し官軍勝利を
 得るも双万死傷ハ



多かりけり

〇こゝ小大カ騎士

狭間川

族増田宗太郎との入る者
 膽ぶくも味方をあつめ
 先年百姓一揆は組せ
 後藤純平と志あり合せ
 三月三十一日夜も十一時頃
 惣勢凡三百余人を
 白布の陣巻に四組
 押込し一組の逆徒
 大支廳は乱入し
 切くやまらり宿直の官吏



暴殺一 浮世茶中銃と奪ひとり
 大もともあり支廳と奪ひとり
 下組の銃を察し置入乱入
 官扱あどもを奪ひとり
 下組の縣友堀多右氏の
 邸宅と銃を奪ひとり堀多右氏と
 殺害一 同氏が
 懐中の金を奪ひとり
 下組の縣友馬淵
 氏ととも奪ひとり
 仲る町の屋敷を
 銃を奪ひとり

増田宋太郎



別府村
陣とる

全各所へ
報せし

無用の銭を
 その往き
 ひそく裏
 忍び出徒の
 難をのうれ
 さく中津の
 紙徒と
 徳役場
 火を



三日浅間
巡査の抜刀隊
背後へ

別府
兵士
軍

宇佐郡
唐島村

越知彦四郎。村上彦十。久見巖。加藤固。

久世芳磨等。同縣の士族五百余人を

煽動。三月廿八日七隈村に屯集せ

ひ。下の関人等。久世官軍の死

出兵。廿九日福岡に着。三十日

明石釜村にて幾端をひらき

曲端にて彼徒の

隊長下間

○久世の

兩人ハ

うち死

村上彦十



○越知彦四郎もあ
百余人のひどられ

其れのもの

自ら訴へ生

けりまた又

八代目の

官軍ハ



下間甚吾

暴徒ガ

けしを絶切らんと

奮撃する事。日ごろは培し

◇四月

一日官

原より

宇土の

中へ入

中へ植木の

官軍ハ

吉右衛門の

右の方

ある

三の嶽

を

多切二日本留町

邊見十郎太

せめ入る鹿兒ト中
方の勢きや一所を
焚きしひ積ひく邊田野の
暴徒を狙撃し時川尻の
本陣ある西郷隆盛
こもるを味方の
死傷多けり
新島の兵を
つのもろし
隊長ある別府新助。邊見十郎太
○樺山久兵衛の三人をよねき

別府新助



りそぎ鹿兒ト中
兵を募り有りけり
かこめぬと
三人の鹿兒ト中
帰郷あり
同様の
大書記官
田畑常秋と
お徳一士族等
追ちりり千五百人
召しあつめ加治木より
八代街を掃き出



西郷隆盛

高島忠佐の
引率せし
別働隊を
らちやめん
と玖磨川
あぐ押し
よせし
官軍の川の
此方よ
兵を死せし
つぎ

鹿見時五郎

胸壁をつき防衛の術を
つゝたゞと鹿兒島

方千五百人味方

僅ら小三大隊ゆゑ

田島常秋

苦戦

あゝあ

ける

鹿兒島戦記

第五篇上畢

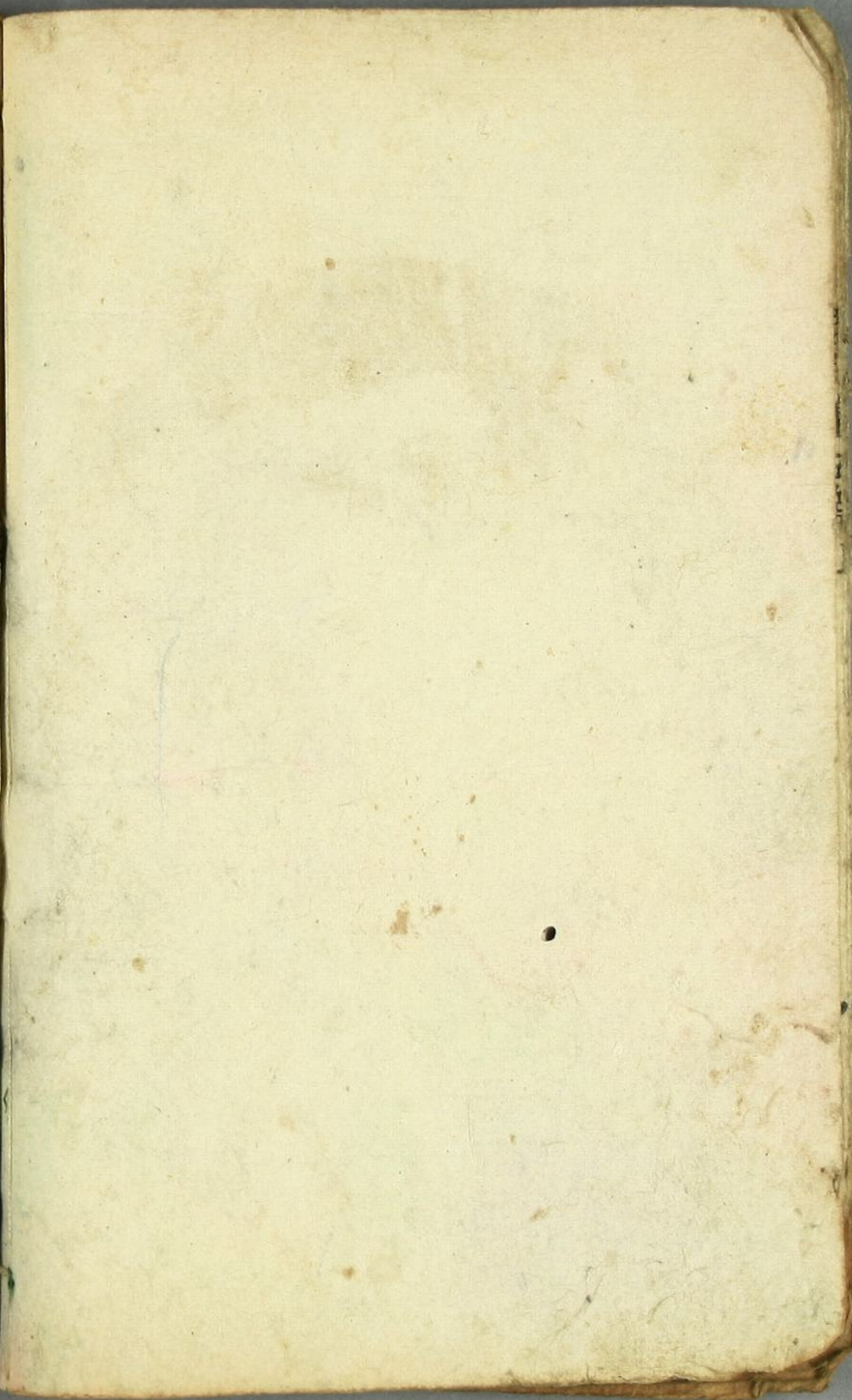




鹿 児 お戦 記

加々吉板
第十

篠田久次郎編



篠田仙果録
永島孟齋畫

繪本 鹿兒島戰記

東京書肆

青成堂版

鹿兒島戰記五編下

東京

篠田仙果編

茲は鹿兒島の縣廳より大書記官の

田畠常秋 田畠常秋

西郷隆盛が兵をひらき

出張する名義ありき

事と思ふに兵糧

強奪軍用金の中

何れもとてありて

勅使柳右衛門公鹿兒島に入

りて懇々説諭ありけり

其非を知るものなりと云ふ



鹿兒島戰記五編下

割後あーく
失ふける
○よのあふ
マよ出張
せー官軍
方の抜刀
隊いのつまも
撥こんあれば
その勇猛絶倫
めと暴徒が堅固の
つき立つる三の墨場へ
わり入るあぞ鹿兒トぬ



〇襷をもちあは
みどりの

うち乱し難か
お振るあんなと
撥こりたる

がもこを詮途
老ぞ一防ぎ
残ひこもど
終は放
こたも
折
暴徒ら
陣より
齡のろど
廿三と
婦人脇に
布帯の



△往古の巴
阿能の局も
形をこせり

官軍の面
あつたは海
合ひ武術の
早
目

○さて又江田
陸軍が佐
運漕兵を
引率し吉治載入
操り出せり異徒も
運漕の市街へぞ
破つて成るも
と墨場の内より

小銃をのりて烈々
おしよせの官軍も
をくはてみ共の
砲撃をも折
暴徒が陣より
大ひるる赤牝
二足も怒りうと
走り立すも
牝どこの角を
あり立猛り狂ひ
近衛の陣を
ひるやをひとこらひ



小銃を中
構へまの陣
あつせを
荒牝はうと
火を切り二足の
牛うち前めたり
○この小銃花の
角力
年寄

乃中せりて妙
避へて道もさけ
是の官兵
大ひるる
四五十間
退き



至る角力奥行あせし
暴徒ら把迄強く押して
鹿兒一まの
長寄より
と奥行あり
路を所々方々
筋より九州
連まて西国
わの角力
と云へる
の角力
連まて西国
筋より九州
路を所々方々
と奥行あり
長寄より
鹿兒一まの

あしふ
狩りし鹿
兒島人等
おろしあり
しと大のみ
後ひ再々
解力奥の
さすり
角力
を一味
さらせり



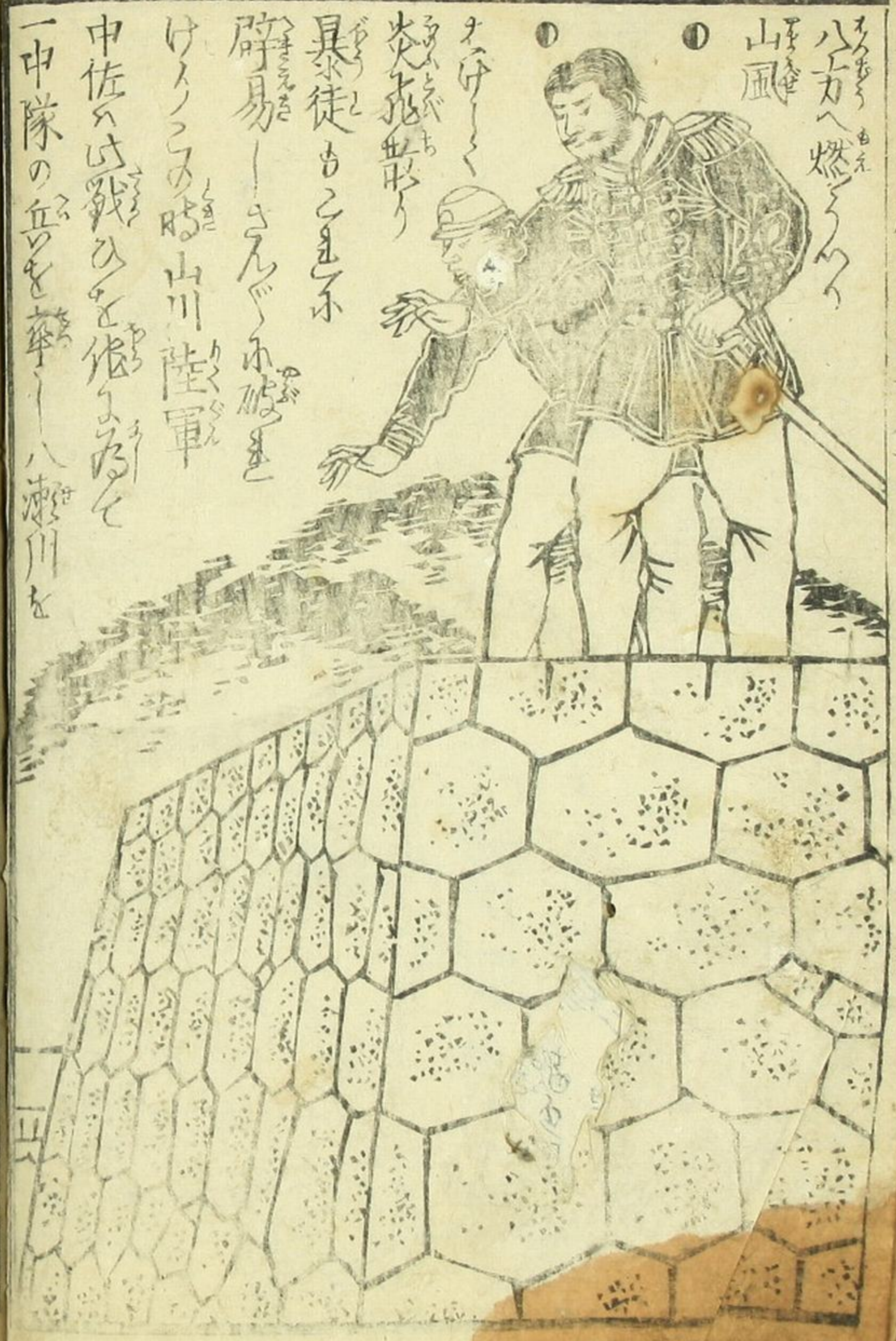
▲之を拵らせ先陣人を中世に
番丸よけふは日あり又
聖場の土俵を運せ日々
苦役をさせしとぞ時四月
十五日山田陸軍▲

あしふ
狩りし鹿
兒島人等
おろしあり
しと大のみ
後ひ再々
解力奥の
さすり
角力
を一味
さらせり



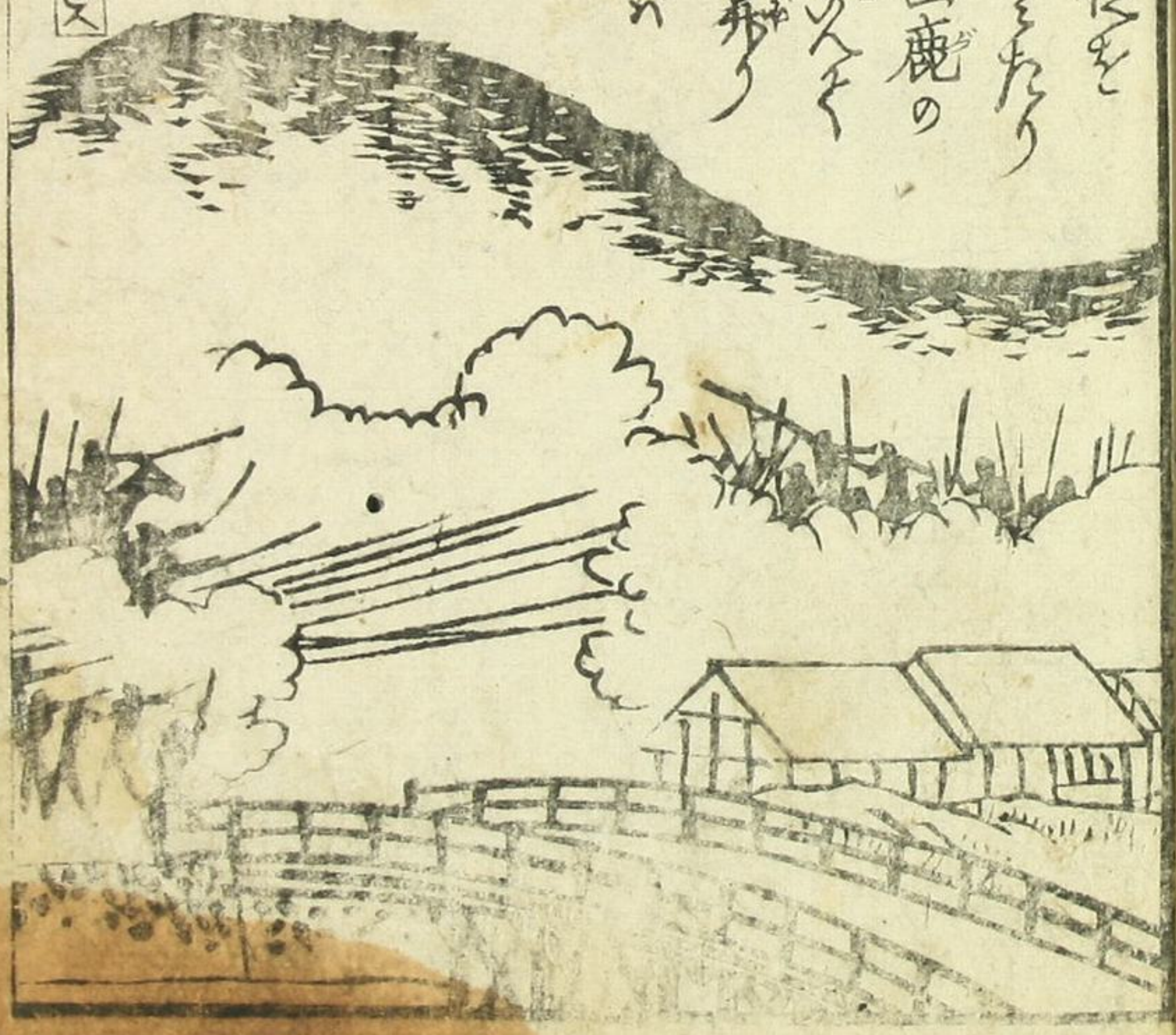
指揮
緑川を押し
敵の聖場人
切りひき
列働隊
の兵を
小女屋人火を
早

八方へ燃えつゝ
山風



暴徒もこまよ
辟易—さんぐく小破
けんこの時山川陸軍
中佐は戦ひを倦みおを
一中隊の兵を率へ八瀬川を

遊りて疎まざる異徒を
うち掃ひ絶たせむく進またり
さて又然幸城中の山鹿の
がよいと激しく砲声響んそ
迎ぐくぬそ谷お好擲よ昇
早くもそれとさあひけれ
け方よりもけをひ下り
令を下せが猛攻のゆえに
をり梓山中佐見玉
少佐の一大隊の兵を
率へ城門をさりと押し
突つた下つとむろり小



影 出 せ
 さ
 その
 勢 破
 竹の如く
 城を圍じ
 席をとりて
 勢へを二つに
 うつてをさか
 尾 徒も防衛の
 解とりにし



りとて我ひし
 山鹿口の竹を
 うつと背兵の
 註をさかき
 あれが異は
 どこの勢をさか
 日向強へ引よ
 勢と山川陸軍
 中佐も速く
 敵をもち掃
 徳本の成下
 山見王の夜



西氏も知向の一同よから難波とよ

城中のそこの祝炮を数々ぬ

吹陣五十有余日勇猛

比の鹿兒とる勢がう

圍うーとさうふ屋を

筆威を治とけーの代

赤夢の事どもありさう

徳の事と迎ふん欲まへん

あーとこれの懸懸を

元の姫くふわれ

総督有桐川の

宮らとめえ軍方

池邊吉十郎



大山 郷 東 邊 田 常 切 後 路
切後をりは上る日向
路もて所残あさんと

西郷隆盛

ありて本營を徳本城内に

移されしう○こふ西々隆盛

急よ薩長の人々をまね

官軍徳本へ連絡

味が多く控へられ

一旦鹿兒人多くま

桐野利秋

再度の戦ひ致さんとの

桐野らうち滑してま

ま



山下謙蔵

いみ放つを徳もとの
巨魁池邊吉十郎を
出でし兵を引上る
いしゆの徳もとの
本營
山と
定あ
大
図



鹿兒島城下
 五月五日夜中
 明らき
 暴徒等
 甲突川を渉り
 城山の麓
 官軍小



○時、河村参軍。
 大山少将。高野少将の
 徳右衛門の雄九少将あり
 従兵士ありてを数艘の



竹宮御船へんゆき
 防戦しをりてゆて
 日向島へ引えりんと
 のひけるあを徳右衛門
 隊長山下孫藏。日吉義正。
 田中東穂も同意しけり
 俣定定まりをれく兵を

近付ちかづきらうとねと期ましたる
 事ことあまの官軍くわんぐん一声いっせい
 炮はつ撃げきしかり戦いくさひの
 妨さまたげらるれ城下じやうげの
 おもむく火ひを
 かけれかれれがが心こころち
 四方よは燃もえ上あり
 大おほい八や方はみと云いふ
 散ちらるる二に里りも余あり
 拂はらひぬ

鹿兒島戦記五編 終

河村参軍



鹿兒島城山

010190509848

